受け継がれてきた「島々の誇り」に迫る！

「ほこらしゃ」は、素晴らしい、誇らしいという意味の奄美大島の方言です。現在、奄美群島の自然に対する関心が高まる中、本展では、これまであまり知られてこなかった奄美の歴史と文化に光を当て、奄美のほこらしゃを紹介します。

奄美の人々は、自然と共生し、海を越えて交流をしてきました。そして、その文化は、南九州や琉球などの影響を受け複雑な歴史の中で育まれました。人々が歩んだ歴史的背景に加え、島やシマ（集落）ごとに異なる島唄や踊り、歴史資料や美術作品、民具などの貴重な資料をとおしてその文化の源流に迫ります。

倉木崎海底遺跡出土龍泉窯系青磁碗【宇検村教育委員会蔵】

プロローグ　奄美への誘い ―画家田中一村を魅了した奄美

奄美群島の文化は、世界にも認められた多様で豊かな自然の中で育まれました。

戦後、奄美大島へ移住した日本画家田中一村は、奄美の自然と文化に共感し、島外出身者の視点から奄美の自然や風俗を見つめ、その魅力を自らの作品に表現しました。本章では、田中一村の作品を道しるべにして、皆様を奄美の世界へと誘います。

国指定特別天然記念物 アマミノクロウサギ剥製【黎明館蔵】

第1章　琉球弧をつなぐ海上の道

7世紀～14世紀頃、南九州から南西諸島にかけての島々（琉球弧）を舞台に、活発な海上の交流が展開しました。

奄美群島各地の遺跡からは、人々の交流を伝える数多くの資料が出土しています。本章では、奄美大島の小湊フワガネク遺跡や倉木崎海底遺跡、徳之島のカムィヤキ古窯跡遺跡、喜界島の城久遺跡群の出土資料を中心に取り上げ、当時の人・モノ・文化の移動と歴史的展開を紹介します。

重要文化財 ヤコウガイ貝匙【奄美市立奄美博物館蔵】

第2章　琉球王国と祝女の祈り

15世紀半ば～16世紀にかけて、奄美の島々を統治下においた琉球王国は、間切・シマ制度を導入し、役人や女性祭祀者のノロを任命しました。本章では、琉球の古代歌謡集『おもろそうし』と首里王府の発給した辞令書から、奄美と琉球の関わりを紹介します。また、近年まで存続したノロに焦点を当て、その衣裳や祭具、祭祀を紹介します。

重要文化財 尚家本おもろそうし第十三【沖縄県立博物館・美術館蔵】

鹿児島県指定有形民俗文化財 芭蕉白地神衣【奄美市立奄美博物館蔵】

第3章　サトウキビのざわめき

17世紀初頭、薩摩藩の琉球出兵により、奄美群島は琉球王国から切り離され、薩摩藩の統治下におかれました。本章では、薩摩藩の統治や当時の人々の生活の様子、サトウキビ生産に焦点を当て、近世から近代にかけての奄美群島の歴史と、奄美と鹿児島を往来した人々の「異文化」理解について紹介します。

サタグルマ【黎明館蔵】

第4章　島とシマの世界

人々の生産活動、言葉や習俗、唄、踊りなどの文化は、自然環境に影響を受けつつ、島ごとに、さらには生活空間であるシマ（集落）ごとに違いや特色が見られます。本章では、漁業、農耕、織物などの生産、年中行事や八月踊りなどの民俗行事に焦点を当て、シマを舞台に展開した人々の伝統的な生活の営みや特色豊かな文化、鹿児島と奄美群島で共有または双方へ伝播した文化について紹介します。

与論十五夜踊の朝伊奈面【黎明館蔵】

左／テル（沖永良部島の漁師籠）【黎明館蔵】　右／サワラエギ【黎明館蔵】

田中一村筆「アダンと小舟」【田中一村記念美術館蔵 ©2021 Hiroshi Niiyama】

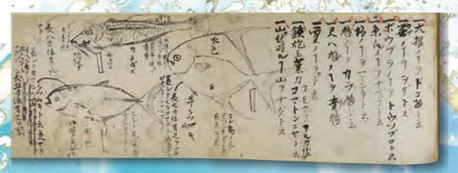
エピローグ　現代の奄美

終戦の翌年、奄美群島は米軍統治下におかれましたが、群島内外の活発な復帰運動により昭和28（1953）年に日本復帰を果たしました。戦後から現在に至る日本社会の経済発展により生活スタイルは変化し、受け継がれてきた文化も、少しずつ形を変えてきました。現在、人口減少や少子高齢化などの難しい課題がある一方で、奄美の「ほこらしゃ」は次世代に継承されようとしています。本章では、写真パネルなどからその一端を紹介し、これからの奄美群島を見つめます。

上／鹿児島県指定無形民俗文化財 節田マンカイ（映像）
右／豊年祭の土俵入り【宇検村教育委員会提供】

南島雑話（部分 歌掛の図）【奄美市立奄美博物館蔵】

大嶋古図【鹿児島県立図書館蔵】



名越左源太自筆南島雑話下絵【奄美市立奄美博物館蔵】

名護市指定有形文化財 琉球嶌真景絵巻（部分 第5図）【名護市立名護博物館蔵】